

季節風

北海道医報購読料年間3,000円。北海道医師会員にあっては会費の中に含まれています。

所得仮説と社会疫学 =Social Epidemiology=

情報広報部 山本 直也

寝正月には日頃一気に読もうと手元に置いてあった本を、時間を気兼ねせずに寝転びながら読むことにしている。今年は山崎正和氏の評論集「アメリカ極支配体制をどう受け入れるか」を半分寝ながら読み出したが、案に相違していつの間にかメモを取り肅然とした気持ちになり、静謐な時間を過ごした。

★ ★ ★

テロリズム、拉致問題、イラク戦争等からポピュリズム、ジャーナリズムに至る幅広い次の時代を見据えた評論は、われわれ医療という狭い社会で生きている者に「戦後」という社会構造が決定的に終焉し、歴史的にも新たな時代に入っていることを厳粛に教えてくれる。われわれの身近に生じている問題をとっても、名義貸しから始まって卒後臨床研修、医療事故の多発、医療費抑制、医療特区、株式会社の病院経営参入、保健所長問題等々と国立大学・病院の独立法人化、厚生年金基金の多数の代行返上や給付水準の切り下げが避けられない公的年金の改定にも見られる如く社会が根底的に地鳴りを起こしながら変動しているのが肌身に感じられる。洒落な人柄で知られる山崎氏は北大、札幌大の解剖学を担当された山崎春雄先

生の甥っ子さんで、われわれ山仲間の大先輩クンクンこと登山家・生物学者の英雄先生の従兄弟でもあり、京大サロンの仲間、高坂正堯氏らと共に「新現実主義者」と呼ばれる論客として著名であるが、重い課題を扱ったこの評論集のなかにも、思わず笑いを嘸み殺すような小節もあって、半歩遅れの読書術という著者の読書風景が描かれており、眠る前に読む本としては川本三郎氏の名作が最適であるが面白すぎて眠気が覚める危険があると洒落込んでいる。また、貧しい高校時代の書店での立ち読みの癖から、内容の濃い緻密な一節は今でも立ち上がって読むと頭に入るといふ笑えない癖を披露し、仕事に無縁な本ほど忙しい時に読み耽ってしまう逃避としての読書も紹介されていて、思わずわが身を振り返させられる。

★ ★ ★

こうゆう読書が目前の仕事に役立つことがしばしばあると書いてあったが、本当のことでいつもは読まずにゴミ箱に直行する医学界新聞に見たことのない社会疫学という文字がふと目についた。Ichiro Kawachi氏というハーバードの社会疫学の教授の対談記事には、「相対的所得仮説」という見慣れない用語があり社会疫学という新分野の紹介記事であった。絶対的所得仮説は飢餓的貧困という言葉に象徴される低所得層に病気が多く死亡率が高いという古くから受け入れられている知識ですが、相対的所得仮説とは所得格差の大きさを示すGini係数を尺度に生活水準の高い先進国間にあっても所得格差の大きい国ほど平均寿命が低いことを相関係数をもちいて示しており、同様にアメリカ50州の殺人発生率も所得格差の大きさと相関することが示されており、最近の日本のGini係数の上昇は、わが国の明日の様相が徒ならぬものであることを暗示していると言えよう。